



1998年6月12日、中欧スロヴァキア東部モルダヴァナドボドヴォで、教育現場での母国語の使用制限の動きに抗議するハンガリー人市民のデモ（共同通信社提供）

＊ナショナリズムへの学問的関心が高まったのは、社会主義体制に破綻が見えはじめた1980年代であった。それはまた、中東欧においてナショナリズムの「復活」が予兆された時代でもあった。この時代、ゲルナー、アンダーソン、ホブズボーム、スミスといった研究者によって、ナショナリズムに対する理論的な知見は急速に高められた。「ネーション」はもはや所与の実在ではなく、社会的・政治的過程のなかで構築されてきたものであることが明らかにされた。そして彼らの著作は、たちまちのうちに、誰もが読むべきナショナリズム論の「古典」としての地位を確立するに至る。「想像の共同体」「伝統の創造」「エトニー」などの概念は、ナショナリズムを研究する者がどこかで言及しなければならない必須のタームとなった。しかしその後も、ナショナリズム研究はさらに進展し続け、これらの古典を超えるさまざまな理論枠組みの模索が、現在も進行中である。＊

「ナショナリズムの理論史」を語るほどに、ナショナリズム論は長い時間的蓄積をもつわけではない。人文社会諸科学のなかで、むしろナショナリズムは長らく周辺的な研究対象だった。それが大きく変化するのが1980年代である。この時期になって、堰を切ったかのように多くのナショナリズム論が発表された。まず82年にはJ. ブルイヤーによる比較研究 (Breuilly [1993]), J. アームストロングの「ナショナリズム以前のネーション」に関する研究 (Armstrong [1982]) が出版され、83年に入るとB. アンダーソンの『想像された共同体』(邦訳は『想像の共同体』, E. ゲルナーの『ネーションとナショナリズム』(邦訳は『民族とナショナリズム』) が出版された (Anderson [1983→1991], Gellner [1983])。またE. ホブズボームとT. レンジャーの編集による『発明された伝統』(邦訳は『創られた伝統』) が出版されたのも83年であった (Hobsbawm and Ranger eds. [1983])。85年にはホブズボームがベルフアストでナショナリズムに関する連続講義を行い、のちにそれを基に『1780年以後のネーションとナショナリズム』(邦訳は『ナショナリズムの歴史と現在』) が出版されることになる (Hobsbawm [1990])。そして86年には「近代主義」批判の代表的な論者であるA. D. スミスの『ネーションのエスニックな諸起源』(邦訳は『ネイションとエスニシティ』, Smith [1986]) が出版される。

これらの研究を、ここでは「古典的ナショナリズム論」と総称しておこう。「古典」と呼ぶにしているのは時代的に新しすぎるかもしれないが、現在のナショナリズム論の基本線を設定し、今日に至るまで絶えず参照され続けているのはこれらの著作群である。またこれ以後、ナショナリズムに対する関心が急速に高まり、研究者の数も増加し、「ナショナリズム研究」と呼べるだけの厚みをもった学問的言論の場が構成されるに至ったのである。

本章では、ナショナリズム論の歴史を、この「古典的」ナショナリズム論を中心に、その前後に「古典以前」と「古典以後」を置き、時系列的3節構成で紹介していきたい。

1 「古典以前」のナショナリズム論

ナショナリズム論の歴史をたどっていくと、19世紀にはE. ルナッやO. バウアーのものがあり、20世紀初頭の社会学者M. ヴェーバーにも興味深いネーション論がある。とくにヴェーバーのそれは、ネーションを共通の政治体験に基づいた「記憶の共同体」であるということを指摘している点で注目される (Weber [1972] p. 515)。しかしネーションが学問的考察の対象となるのは第一次世界大戦終結後、1920年代頃からであり、おそらくC. ヘイズの研究がその嚆矢であろう (Hayes [1926], [1931])。その後、第二次世界大戦中から戦後にかけて、歴史学、政治学、社会学、人類学等、さまざまな学問分野で研究が行われ、散発的ながら多くの著作も発表された。そのなかには、現在までも読み継がれている名著も少なくない。

1980年代より前のナショナリズム論を整理すると、大きく言う二つの対照的なアプローチが存在していたように思われる。その一つは、思想的・觀念史的アプローチである。ヘイズ, H. コーシ (Kohn [1944]), E. ケドゥーリ (Kedourie [1960]) などに代表されるこのアプローチは、ナショナリズムにおける觀念やイデオロギーの内容に注目し、その歴史的な発展や類型を描き出した。コーシの「西のナショナリズム」「東のナショナリズム」の二分法的類型論は、「シビック・ナショナリズム/エスニック・ナショナリズム」の類型論へと展開され、現在でもしばしば議論の対象となっている

(この二分法に関しては、第13章で論じられる)。

もう一つのアプローチは、広い意味で社会学的と呼びうるものである。1940年代にはナショナリズムの歴史的發展を論じたE. H. カーの研究 (Carr [1945])、50年代にはコミュニケーション論的視点からナショナリズムの形成を論じた政治学者K. ドイツチュの研究 (Deutsch [1953])、60年代には西洋化された知識人に焦点を当てて植民地ナショナリズムを論じたR. エマーソンの研究 (Emerson [1960])、また後に「近代主義」の代表的理論家になるゲルナーのナショナリズム論などが出される (Gellner [1964])。その後は、チエコの歴史学者M. ホロフによる、マルクス主義的な社会経済的發展論の視点からの中東欧のナショナリズムの包括的比較研究 (Hroch [2000])、ドイツチュの近代化論的偏向を批判したW. コナーの「エスノナショナリズム」論 (Connor [1994])、近代化のなかの知識人の役割に着目した「エスノシンボリズム」以前のミスの研究 (Smith [1971])、イギリスにおける地域ナショナリズムの発生を論じたM. ヘクターの「内的植民地主義」論 (Hechter [1975])とT. ネアンの不均等発展論 (Nairn [1977])、ヨーロッパの国家形成の観点からネーションの形成を扱ったC. ティリーらの共同研究 (Tilly ed. [1975])、H. シートン=ワトソンの包括的なナショナリズムの比較史研究 (Seton-Watson [1977])などを挙げる事ができるだろう。主として近代化に関連する社会的・政治的変動に着目したこれらの分析は、80年代に始まる「古典的」ナショナリズム論にも大きな影響を与えている。

これら「古典以前」の研究者の議論にほぼ共通する限界として指摘できるのは、彼らが「ネーション」という存在を自明視する傾向があったということである。彼らにとつての「ネーション」の存在は所与であり、関心の対象はその「ネーション」においてなぜ、い

かにしてナショナリズムが(すなわち「ネーション」の価値を奉じる思想や運動が)発生したのかということだった。

2 「古典的」ナショナリズム論

● 「近代主義」と「反近代主義」

1980年代に始まる「古典的」ナショナリズム論は、ナショナリズムのみならず、ネーションという集団の存在それ自体も社会的・政治的過程のなかで形成・構築されてきたものであることを明らかにした(「ネーション」と「ナショナリズム」の定義についてはColumn ②を参照)。「ネーション」は、もはや自明の政治的・文化的単位ではなく、それ自体が説明されるべき対象として問題にされるようになった。また、この時期を境にナショナリズムに関する研究の量が飛躍的に増大し、さまざまな分析的アプローチが提起され、「ナショナリズム研究」が一つの学問領域として形成された。上に挙げた「古典以前」の研究者の業績も、学術論文での「先行研究」のサーベイや大学での授業などを通じて、ナショナリズム論の先駆的業績として読み直され、再評価されていくのである。

古典的段階におけるナショナリズム論の主要な理論的立場には、いわゆる「近代主義」とそれに対する批判者たちの観点とがある(後者の観点を、ここでは「反近代主義」と総称しておく)。近代主義とは、ネーションやナショナリズムが産業化、資本主義、近代国家形成、民主化、公共圏の形成等によってもたらされた「近代的」な現象であると考えするという立場である。それは、ネーションを太古の昔から存在するものであるとか、自然に存在する所与のものであるなどと理解するナショナリストたちの考え方や、多くの一般人の素朴な常識とは対立する見方である。そのような批判的な(＝常識を

Column ② ネーション、ナショナリズムの定義

「ネーション」の意味は多義的で、ネーション一般についての厳密な定義はほぼ不可能だろう。日本語で考えてみても、ネーションを「国民」と訳すのと「民族」の訳すのでは、かなり意味が異なる（アイヌを自認する人は「日本国民」であるかもしれないが「日本民族」ではない）。しかし、ともに「ネーション」という概念で括られている。

ここで、厳密さには欠くが、とりえず暫定的に次のような定義を行っておこう。《ネーションとは、文化や歴史の記憶を共有し、特定の領域への権限を主張する集団である》。

この定義において、何がその「文化」であり「歴史の記憶」なのか、どこがその「領域」で、「権限」とはどのような権限であり、その「主張」がどのように表出されているのかなどについては明らかでない。しかしじつは、こうした問題については同一のネーションに属するとされる人々の間でもさまざまな解釈の違いがあり、論争の対象となっている。ネーションとは、常に自らの定義（「あるべき姿」）を模索し、模索し続けることによって成立している集団なのである。

また、「ナショナリズム」も研究者によってさまざまな意味（価値判断を含んだ）で用いられている。ここでは、それを全て包含しうる形で、次のように定義しておく。《ナショナリズムとは、ネーションおよびそれと等価な概念（国名等）の価値を奉じる言論および実践の集合である》。その具体的目的はさまざまなものである。主権国家の確立、「失地」の回復、異民族の排除、アイデンティティや歴史観の確立などが代表的だが、決してそれだけに限定される必然性はない。ナショナリズムをこうした具体的目的によって定義することはできない。ナショナリズムは、あらゆる政治的目的と接合しうるものである。

疑う) 視点が、1980年代にナショナリズムを学問的研究対象へと押し上げるのに大きく貢献した。80年代から90年代初めのナショナリズム論において主導的役割を果たしたのは、この「近代主義」であったと言える。

このようなアプローチの行き過ぎや誤りを指摘し、ネーションやナショナリズムは100%全面的に「近代」の現象ではないと主張し

たのが「反近代主義」の論者である。彼らの議論は一樣ではないが、そこに共通する論点は二つある。第一に、確かに近代化のインパクトは大きかったにせよ、ネーションやナショナリズムが近代化の作川によって、まったく何もない状況から発生したわけではないという点である。そして、ネーションの発生の始点や基盤を近代以前に求めようとする議論が展開される。第二に、人々がネーションに対して投じている感情的アタッチメントを重視するという点である。反近代主義からすれば、近代主義の議論はこの点を十分に説明していないのである。

以下、双方の立場からの研究を、それぞれの内部における観点の多様性に配慮しながら簡単に紹介していきたい。

近代主義

近代主義は、前段で名前を挙げておいたブルイリー、ゲルナー、アンダーソン、ホブズボームらによって代表される。また、ここにティリー (Tilly [1990]) や P. ブラッス (Brass [1991])、A. ギデンズ (Giddens [1985]) や M. マン (Mann [1992], [1993])、E. バリバーや I. ウォーラスティン (Balibar and Wallerstein [1991]) 等が加わり、ナショナリズム論の一つの支配的な論調をつくりだしていった。

ここでは近代主義において、ネーションやナショナリズムを発生させる要因として指摘されているものを、四つにまとめて紹介しておくことにしたい。

① **社会経済的変動** 産業化や資本主義の勃興などは、これまで社会科学（近代化論やマルクス主義理論）で繰り返し論じられてきた馴染みのテーマだったが、ナショナリズム論においてもこうした社会経済的変動がネーション形成の要因として議論されている。たとえばゲルナーは「産業化」を、アンダーソンは「出版資本主義」（出版物が商品として市場で売買されること）の勃興を、それぞれネー

ション形成の最も重要な要因として挙げているのである。二人とも、こうした社会経済的変動の文化的な作用に注目した点では共通している。

ゲルナーは、産業化によって社会的流動化が高まり、それ以前の農業社会においては身分や地域によって多様に分断されていた文化が次第に標準化され、その結果均質な文化共同体としてのネーションが発生したと論じている。しかし彼の議論では、産業化以前にナショナリズムが発生している例（たとえば19世紀中頃の東ヨーロッパの例など）についての説明がつかないという難点もある。

それに対してアンダーソンの言う出版資本主義は、西欧と北米において18世紀中頃から顕著になった現象であり、ゲルナーの産業化よりも約1世紀近く早く発生していることになる。出版資本主義の発生により、新聞・雑誌、本などの出版物が広く流通し読まれるようになる、人々の時空間に関する了解形式が大きく変容する。一度も顔を合わせたことのない多数の人々の間に「想像の共同体」が形成されるのである。アンダーソンは、「われわれ国民は……」のような形で想像されるネーションもまた、想像の共同体の一つであると論じる。

しかしこれらの社会経済的変動は、ネーションやナショナリズムの発生要因としては一般的すぎて、「なぜネーションなのか」という問題には十分答えられていない面もある。

②国家 近代国家の成立は、ネーションの形成にとってきわめて重要な意味をもっている（「国家」と「ネーション」の違いについてはColumn ③を参照）。しかし国家とネーションとの関係も一様ではない。

第一にはティリーやギデンズが指摘しているような、国家の統治機能の変容の問題がある。近代国家における軍事力の集中と官僚機

Column ③ ネーションと国家

「ネーション (nation)」と「国家 (state)」は、英語でも日本語でもしばしば混同して用いられる。日常的にこの二つが混同されるのは、それなりの理由が十分にあるわけだが、学問的分析のためにはこの二つを明確に分けて把握する必要がある。

まず、ネーションとは人間の集合体（共同体）のことである。それに対して国家は、特定の領域の統治を目的としたさまざまな制度の集合体のことである。要するに、ネーションとは人間からなるもの（つまり「民」）なのに対して、国家は政府、官僚制、議会、軍隊などの制度が寄り集まってできたものである。もちろん国家が運営されるためには、その各制度の役職に人間が補填されなければならない（大臣、官僚、議員、軍人等々）。しかし国家それ自体は人間のことではなく、その役職を担う人員が入れ替わっても存続していく非人格化された制度のことを意味する。ただし、このような国家と人間との分化は近代国家の特徴であって、それ以前の時代において、「国家」は君主や王家の地位のことを意味した。

ネーションと国家の境界線は一致しないことが多い。ネーションは国家を排除し、国境線を越えて広がる。それが民族マイノリティや在外民族同胞を発生させる。こうした国家とネーションの境界線の不一致は、さまざまな「民族紛争」が発生する要因の一つになる。

鼎の確立により、多元的にかつ人的関係性（封建的主従関係など）に依拠した権力関係が解体され、一元的な統治が可能になる。その結果、統治下の住民は外に対しては明確に境界づけられ、内側においては均質な人間の集団である「ネーション（＝国民）」として把握されるようになった。

第二にはブルイリーやマンが指摘しているような、国家に対する制度的政治運動の発生という要因がある。国家の支配層への権力の集中に対抗し、「人民」の政治参加や自由を求める運動（フランス革命などに見られるような）を通して、均質でかつ平等な諸個人からなるネーションの概念が確立されていた。ホブズボームが近代的ネーションの特性として指摘している「国家＝ネーション＝人民」の

等式も、このような政治的変動のなかで形成されていくのである。

第三に注目すべきなのは、アンダーソンが「巡礼」という言葉で把握する現象である。これは、国家の行政システムや教育システム内におけるキャリア形成のなかで、人々が国家の境界内を移動し、さまざまな地域の出身者との社会的遭遇をルーティン的に繰り返すなかで、「ネーション」の一体性の感覚を身につけていく過程を指している。

これらの国家的要因は、境界づけられた政治共同体としてのネーション(=国民)の形成を説明することができる。だが、国家の境界と一致していないような多くのネーション(=民族)の例を説明するのには十分ではない。

③政治エリート 政治エリートによる「道具主義的な操作」が果たす役割も重要である。政治が民主化されていくなかで、政治エリートはそれまで政治から排除されてきた一般民衆を動員し、自らの権力基盤を強固にするための手段としてネーションの概念を「操作」してきた。プラスやホブズボームがこの側面を強調している。

とくにホブズボームは「伝統の発明(創造)」という概念により、ナショナルな伝統とされているシンボルや儀礼が、じつは近代に入って「発明(創造)」されたものであることを指摘した。しかしながら、政治エリートの「操作」は決して万能ではない。彼らによって創出されたネーションのシンボルが民衆から受け入れられるには、それ相応の社会的・文化的基盤が必要とされるであろう。

④文化変動と知識人 ネーションが文化的資源を媒介にして「想像」された共同体であるとすれば、教育の向上、識字率の増大、出版文化の発達による公共的な文化圏の発達は、ネーション発生の不可欠な条件となる。すでに①でふれたゲルナールやアンダーソンの議論でも、そのことが示唆されていた。また、マンも「言論リテラ

シー」(本や新聞などの出版メディアを媒介にしたコミュニケーション能力)の発生を、国家形成と並ぶネーション形成の重要な要因の一つと見なしている。

そのような公共的文化圏のなかで果たす「知識人」(歴史家、民俗学者、言語学者、文学者、ジャーナリスト、芸術家など)の存在も重要である。彼らはネーションの文化や歴史を定義・解釈し、それを一般の読者層や公衆に向けて提示し、普及させていく。これまで多くの研究者が知識人が果たす役割についてふれているが、アンダーソンやホブズボームの議論は、その重要性が主としてナショナルリズムの歴史の初期に限られていることを示唆している。文化が大衆化していくなかで、知識人よりもむしろ「マス」なメディアの役割が重要になっていく。

反近代主義

反近代主義には大きく分けて三つの立場がある。「エスノシンボリズム」「前近代主義」「原初主義」がその三つである。

①エスノシンボリズム エスノシンボリズムは、反近代主義を代表するスミスが唱導するものである(Smith [1986], [1998])。彼は、アームストロングの著作の影響を受け、1980年代の後半になって近代主義への批判的立場を明確にしていた。スミスの議論の要点は、ネーションは近代以前にその「ルーツ」をもっているというところにある。そのルーツを彼は「エトニー(ethnie)」と名づける。エトニーとは、歴史の記憶や文化を共有する共同体のことである。しかしスミスは、近代主義の知見をまったく否定しているわけではない。むしろ彼は、エトニーとネーションを区別したらえて、ネーションやナショナルリズムは近代になって発生したと論じている。さらに彼は、エトニーの記憶や文化的シンボルが近代に入って知識人によってしばしば恣意的につくり変えられることも指摘している。

Column ④ ナショナリズムとリベラリズム

いわゆるグローバル化が進み、ネーションの存在自体が問い直されるなか、ナショナリズムに対する批判と擁護をめぐる政治哲学的論争も活発化している。これまで先進国においては、ナショナリズムの擁護は保守の側からなされるが多かったのだが、最近になって注目されるのは、個人の自由と平等を重んじるリベラリズムの側からナショナリズム擁護論が持ち上がってきたことだ。Y. タミール (Tamir [1993]), D. ミラー (Miller [1995]), そしてマイノリティ・ナショナリズムの立場にたった W. キムリック (Kimlicka [1995]) らがその代表的な論客である。彼らは、ネーションという文化共同体への帰属が、①個人にアイデンティティと人格的自律性を与えるだけでなく、②同胞に対する義務感や相互の信頼関係を醸成し、それが社会的正義の実現や民主主義を可能にしていることを指摘することにより、ネーションの維持を主張するナショナリズムが、リベラリズムの観点から擁護できると主張する。しかし、そのような議論に対しては多くの批判も出されている (Couture et al. eds. [1998], Beiner ed. [1999])。ナショナリズムが、結局は少数者の抑圧、非成員の排除、差異の同化など、個人の自由平等という普遍的なリベラリズムの原則とは根本的に相容れないものであるというのが、その批判の論点の中心にある。法のものと平等や権利の保障などのリベラリズムの諸原理が、「ネーション」の基礎のうえに実現されてきたように、確かにナショナリズムとリベラリズムは歴史的現実のなかでは結びついてきたし、現在でも結びついている面がある。しかし、その結びつきを政治哲学的にどう判断し議論するのかは、また別の問題である。

日本においても、姜尚中・森葉博『ナショナリズムの克服』(2002)のよきな明確なナショナリズム批判論と、井関正敏『ナショナリズムの練習問題』(2005)のよりなリベラリズムからのナショナリズム擁護論がともに読みやすい新書版で出版されているので、読み比べてみることをお薦めする。

J. ハッチンソンはエスノシンボリズムの観点をさらに発展させ、ネーションをエトニーの記憶をめぐる「紛争の場」とであると論じている (Hutchinson [2005])。彼の議論においては、歴史的なエトニーが近代のネーションを直接的に規定するわけではなく、むしろそれがネーション形成のなかでさまざまに参照され、解釈され、変形

させられていく過程が注目されている。

②前近代主義 前近代主義とは、ネーションやナショナリズムの発生を近代以前に求めるものを指す。A. ヘイスティングス (Hastings [1997]) や J. R. ロベラ (Llobera [1994]) などは、ヨーロッパにおいて、ネーションやナショナリズムがすでに中世において発生していたとする議論を展開している。たとえばキリスト教史を専門にするヘイスティングスは、現地語 (ヴァナキユラー) による書記言語の確立 (とくに聖書の翻訳を通じた) をネーション形成の重要な要因と捉え、イングランドでは遅くとも14世紀にはネーションが成立していたとする。

その他に、数多くのヨーロッパ中世史の研究者たちが、中世におけるネーションやナショナリズムの存在を指摘し、近代主義の議論への反論を試みている点にも注目すべきであろう (Bjorn et al. eds. [1994], Forde et al. eds. [1995], Reynolds [1997], Scales and Zimmern eds. [2005])。

また、「中世」と「近代」の中間に位置する「近世 (early modern)」においてネーションやナショナリズムが発生したと主張する議論が、社会学者の間にも目立っている。たとえば L. グリーンフェルドの場合、16世紀イングランドにおけるナショナリズムの発生を主張している。また、彼女の議論の特徴は、近代がナショナリズムを生み出したのではなく、ナショナリズムが「近代への道」を規定したとして、近代主義とは因果関係を逆転させているところにある (Greenfield [1992])。また P. ゴースキは15～16世紀のオランダやイギリスにおいて、近代主義者が論じるのと同類のナショナリズムが発生していたとし、その「起源」を探れば、中世にまで遡ることが可能であると論じた (Gorski [2000])。A. W. マークス (Marx [2003]) は16世紀の宗教戦争における宗教的「不寛容」のなかに

近代ナショナリズムの起源を求めている。

③**原初主義** 原初主義とは、ネーションは人類史とともに古く、ネーションへの感情的アタッチメントは人類普遍の属性であるとす
る立場である。最も典型的にはナショナリスト自身の思想に見出さ
れるこの種の考え方は、これまで学問的ナショナリズム研究では決
して評判のよいものではなかった。E. シルズ (Shils [1957]) や C.
ギアーツ (Geertz [1973]) に原初主義の出所を求めることが一般的
だが、その非科学性を批判する議論が多かった。しかしながら現在、
この原初主義が一部で見直され始めている。たとえば S. グロスビ
ーは、現実のあるいは想定された血統へのアタッチメント (これを
彼は「キンシップ [kinship]」と呼ぶ) を人間の基本的属性の一つと捉
え、家族から部族、ネーションに至る社会現象をそれで説明しよう
とする (Grosby [2005a], [2005b])。また、エスニック集団やネーシ
ョンを「自然種」として認知する人間の心的メカニズムの存在を検
証しようとする F. J. ギル＝ホワイトの研究も注目に値する (Gil-
White [2001])。こうした原初主義見直し論は、近代主義の議論が
ネーションの喚起する感情的アタッチメントを十分に説明してい
ないという反省からくるものである。

近代主義対反近代主義の論争は、ナショナ
リズム論の中心的争点として何度も繰り返

「論争」の行方

された。当初近代主義が圧倒的に優勢であったが、それに対する批
判も根強く続き、1990 年代半ば以降はむしろ反近代主義の側が次
第に形勢を盛り返した感がある。新たな論点が反近代主義の側から
提起され、それに対して近代主義が従来の議論で応戦するという状
況がしばしば見られた。反近代主義の議論は、重要な変化が全て近
代に始まると考えがちな近代主義の盲点を突いた点で重要な役割を
果たしたと言えるだろう。

しかしながら現在、この論争にはむしろその不毛さが目立つよう
になってきた。というのも、そこで「ネーション」や「ナショナリ
ズム」の定義自体が論者によって異なっているからである。結局こ
の論争は、各論者が「何を本[・]当[・]のネーション (ナショナリズム) と考
えるか」についての見解を披瀝し合う場になってしまっているよう
な印象すらある。

そのようななかで、ネーションやナショナリズムの概念を固定的
に(「本質主義的」に)捉えるのではなく、これらの概念によって把
握されている歴史的現象自体をいくつかの要因に分解し、そのうえ
でその諸要因の歴史的経緯をたどるという方法での分析が提唱され
ている。たとえば C. カルフーンは、ナショナリズムを「多様な糸
からなる織物」という比喻で捉える (Calhoun [1997] p. 9)。彼によ
れば、ナショナリズムという現象 (織物) は、さまざまな概念や物
語 (糸) から構成され、各概念や物語はそれぞれ独自の歴史をもっ
ている。ゴースキはカルフーンの観点をさらに発展させ、その各
「糸」がいかにか「織物」へと織り上げられていくのか、その不連続
な歴史の「系譜」をたどることの方が、ナショナリズムの「発生」
を問うよりもはるかに有益だと主張している (Gorski [2000])。

今や、古典的ナショナリズム論を支配した「近代かそれ以前か」
の二分法を脱却する段階にきているように思われる。

3 「古典以後」のナショナリズム論

「古典」からの脱却

1990 年代の半ばを過ぎると、古典的ナシ
ョナリズム論に対して反省的・批判的な議
論が行われるようになってきた。そこで見られる傾向として、とく

に重要と思われる点を二つ挙げておきたい。

第一には、ネーションの集団主義的理解への反省である。前述のように、古典的ナショナリズム論はネーションが社会的・政治的過程のなかで構築されたものであることを明らかにした。だが、仮にネーションを「想像の共同体」と規定するにしても、そこでネーションは、メンバーが皆同一の「われわれ意識」を共有し、同一の「ネーション」を想像する単一の実体であると考えられがちだった。しかしネーションの想像のされ方は一様ではない。ネーションはジエンダーによって (Yuval-Davis [1997])、また宗教や政治党派などによって、異なった理解がなされるであろう。

1990年代半ば頃になると、このようなネーション理解の多義性、その担い手や受け手の多様性を重視する研究が行われるようになる。ネーションはもはや単一に統合された集団ではなく、社会的・政治的位置に応じてさまざまな解釈されたネーション概念が共存・対立し合う言論ネットワークであり、また政治的実践の場であると捉えられるようになっていった (Verdery [1993], 佐藤 [1995], Brubaker [1996], 佐藤 [2000])。さらには、ネーションを現実世界を理解する認知カテゴリーの一つとして捉え、そのカテゴリーがいかにかに形成され、いかに自明視されるようになるのかを、社会的・政治的文脈と関連づけて分析するアプローチも出現している (Sunny [2000], Brubaker [2004])。

第二には、発展史的な歴史観への反省である。古典的ナショナリズム論は、ネーションとナショナリズムの歴史を、「伝統社会」から「近代社会」へという包括的發展の図式のなかに置いて理解しようとしてきた (それが近代の産物であろうが、それ以前に発生したものであろうが)。しかしそのような枠組みでは、現実には起きているナショナリズムの経緯を十分に説明できない。たとえば、なぜ1950年代

のアジア・アフリカの旧植民地地域でナショナリズムが高まったのか。70年代にスコットランドでナショナリズムが台頭したのはなぜなのか。なぜ社会主義崩壊をきっかけに中東欧でナショナリズムが激化したのか。このような経緯は、歴史をさまざまな個別的な変化や出来事の不連続で不確定な連鎖と捉える「事件史的 (event-full)」な視座から説明を試みた方がよいであろう (Brubaker [1996], Weissinger [1998], Hechter [2000])。戦争、条約の締結、革命や暴動、国家の成立や解体、特定の政策の実施や法令の発布、ある団体の結成、政権交代、ある政治リーダーの台頭あるいは失脚、経済状況の変化等、諸々の「事件」が当事者たちの意図を超えて複合的に作用していく過程。ナショナリズムは、そのような過程のなかで生じ、激化し、退潮し、あるいはまた再帰する。何らかの概念化やモデルの提示もまた、そのような過程の検討を通じて行われるのである。

「意味」と「動員」: 二つのアプローチ

それでは、そうした「古典以後」のナショナリズム論はどのような方法でナショナリズムを分析しているのだろうか。ここでは、

近年のナショナリズム研究を通じて用いられることの多い、二つの対照的なアプローチを提示しておきたい。その一つを「文化論的アプローチ」、もう一つを「国家論的アプローチ」と呼ぶことにする。二つのアプローチの相違をわかりやすく言うと、文化論的アプローチはネーションという「想像の共同体」がどのように想像されているのか、その意味形成・意味解釈の過程を分析するものである。それに対し国家論的アプローチは、その想像の共同体がどのように動員されるのかを、国家権力をめぐる政治闘争という観点から分析するものである。文化論的アプローチにおいては、ポスト構造主義的な視点からの「言説分析」や理解社会的な意味解釈の方法が用いられている。国家論的アプローチにおいては政治社会学的な国家

論や社会運動論、合理的選択理論などの方法が用いられる。

「古典」時代の近代主義対反近代主義とは異なり、この二つのアプローチの間に「論争」があるわけではない。しかしその視点は対照的であり、それぞれ長所と短所がある。以下、それぞれのアプローチを紹介し、それぞれの有効性と限界についてまとめとめる。

①文化論的アプローチ 文化論的アプローチは、「言説 (discourse)」や「語り (narrative)」を通じて「ネーション」の意味がいかに構築され、いかに解釈されているのかを分析していこうというものである。「古典以後」のナショナリズム論においては、このような「言説分析」的方法がナショナリズム研究における一つの主要な流れとなっている。カルフーンやU. ウズキリムリなどは、ナショナリズムをM. フーコーの概念を借りて「言説構成体 (discursive formation)」と捉えることを提唱しているほどである (Calhoun [1997], Özkirimli [2000], [2005])。たとえばウズキリムリの場合、「ナショナリズムは世界を理解し解釈する方法の一つ、すなわち言説構成体の一つである」 (Özkirimli [2005] p. 2) と定義される。

文化論的アプローチは、言説が「生産」される局面において捉える方法と、「消費」される局面において捉える方法とに分けて整理することができ、「生産」の局面では、知識人やメディアが生み出したネーションに関するさまざまな言説が検討され、「消費」の局面では、政治家や一般人が、政治や日常生活のなかでいかにネーション概念を受容し、理解し、利用していくのかを検討される。それぞれについて、いくつかの具体例を挙げておこう。

まず、「生産」面に着目した例として、H. バーバとその共同研究者達による「ネーションの語り」に関する研究を挙げることができ (Bhabha ed. [1990])。彼らは、フーコー、J. デリダなどポスト構造主義の理論を利用しながら、主として文学的なテキストにおい

て差異や越境性に由来するネーションの矛盾がいかに見過ごされ、いかに読み替えられていくのかを分析している。また、P. チャタジーは、植民地時代のインドにおける歴史や文学の言論を素材に用い、西欧からの制度や思想が大量に導入されるなか、「物質」と「精神」とを区別し、「精神」の領域において西欧の影響に侵害されないインド独自の「ナショナル」な文化的アイデンティティを確立していこうとする、インド中産階級出身の知識人たちの言説を検討している (Chatterjee [1993])。

また、小熊英二による一連の研究は、明治から昭和に至るさまざまな思想家や学者の言説を検討し、そこにおける「日本人」「民族」などの諸概念がいかに構築され、またいかに多様なものであったのかを明らかにしている (小熊 [1995], [1998], [2002])。それほどの理論的な洗練性があるわけではないが、それまでネーション概念を固定的に考えがちだった日本のナショナリズム研究に、根本的な視点の転換をもたらした研究である。

他方、「消費」面での研究として、吉野耕作のものがある。彼は「日本人論」を「文化ナショナリズム」として扱い、日本の教育者や企業人が、それぞれの日常的職場環境に生活するなかで「日本人論」をいかに解釈し、利用しているのかを明らかにしている (Yoshino [1992], 吉野 [1997])。

M. ビリグは国名、「われわれ」という人称代名詞、「人民」や「社会」など、ネーションという想像上の全体を意味する語句を、人々が当たり前のよう使用している状況を「平凡なナショナリズム」と呼んだ。彼は、政治家のスピーチや新聞記事、政治哲学的討論等のなかにおいて、いかに「平凡なナショナリズム」が発生しているのかを明らかにしている (Billig [1995])。

またL. スピルマンは、オーストラリアとアメリカにおける記念

祭における政治リーダーたちの演説やメディアでの言論を検討し、そこで用いられている「ナショナル・アイデンティティ」を表現する語句の「レパートリー」を明らかにしている (Spillman [1997])。こうした文化論的アプローチは、言説に内在するネーション概念の意味とその微妙な変異を抽出することができる。またネーション概念が日常的な場面でいかに「消費」されているのかを明らかにすることに強みを発揮する。しかしその反面、考察の対象となる言説の外部にある政治的・社会的状況が問われなくなる傾向がある。

②国家論的アプローチ 「ネーション」がどのように動員されるのか。その過程を、国家の権限配分や意思決定をめぐる政治闘争の文脈のなかで把握しようというのが国家論的アプローチである。ネーションの概念やシンボルは、そうした政治闘争のなかで、世論や住民の支持を糾合し、国家に対する要求や主張を正当化するための公共の理念として利用される。そこで世論や住民は、「ネーション」の名において動員されることになる。

政治闘争を誘発する国家的諸問題には、主として三つのものを挙げることができる。第一は、国家における政治的地位や統治権の配分をめぐる問題である。議席や官職ポスト、参政権、行政諸機構への権限などの配分が、政治党派や政治エリートの間での闘争の争点となる。第二は、国家が提供する公共財ないし集合財の配分をめぐる問題である。教育、福祉、土木事業、労働者政策などの公共財が誰に、どのように配分されるのかは、住民の生活にも直接の影響を与える問題であるため、紛争に対する住民参加の度合いも高まる。第三は、領土、憲法、軍事、国籍など国家存立の基本要件に関する方針をめぐる対立である。これらの諸問題をめぐる闘争の中でネーションの概念が動員されるのである。

いくつかの研究例を挙げておこう。J. スナイダーやマンは、政

治的地位をめぐる新旧のエリート間の対立や領域をめぐる民族集団のリーダー間の支配権争いが、民衆を「民族的」な対立へと動員し、極端な場合には「民族浄化」にまで激化することを明らかにしている。その際民主化は、政治エリートたちを民衆動員へと駆りたて、結果としてナショナルリズムを高める要因になった (Snyder [2000], Mann [2005])。S. J. タンバニアやA. ウィマーは、公共財の「不正」な配分をめぐる住民間の対立が、「民族的 (エスニック)」な単位での連帯を強め、民族的 (エスニック) なナショナルリズムを激化させる過程を分析している (Tambiah [1996], Wimmer [2002])。またヘクターは、権力や公共財の配分をめぐるナショナルリズムの発生のメカニズムを、合理的選択理論の枠組みを用いて理論化しようとしてみている (Hechter [2000])。

また、ブルーベーカーは、フランスとドイツの国籍法の制定や改正をめぐる議会内外の政治論争において、「ネーションの自己理解」が政治エリートや諸党派によってどのように利用されていたかを検討している (Brubaker [1992])。佐藤成基は、戦後ドイツでの国籍承認をめぐる政治闘争において「ナショナル・アイデンティティ」がどのように変化したのかを、同様の観点から考察している (佐藤 [2008])。

このような国家論的アプローチは、分離独立運動や異民族排除運動など、何らかの特定の争点と権力闘争をともなった政治的なナショナルリズムの分析に、その有効性を発揮するであろう。しかしその反面で、ネーション概念の意味を内在的に問う視点が不足し、また日常的な生活実践のなかでネーション概念がいかに理解され、受容されているのかを問題にしないという面がある。

接合の試み

近年のナショナルリズム論をリードしてきた「カルチュラル・スタディーズ」や「構築

主義」は、多くの場合、文化論的アプローチに傾斜したものであった。だが、そのような傾向に対する反省的な意見も聞かれるようになっていく。現在のナショナリズム研究における一つの大きなテーマは、上の二つのアプローチをいかに接合していくのかにあると言えるだろう。J. ハーゲンやスピルマンと R. フェージェスなども、近年のナショナリズム論を「文化」ないし「アイデンティティ」の問題を中心としたアプローチと、「権力」ないし「動員」を中心としたアプローチとに分けたあとで、その二つのアプローチを統合していくことの必要性を主張しているのである (Hearn [2006], Spillman and Faeges [2005])。理論的前提の異なったこれら二つのアプローチを、単一の理論体系のもとに統合するのは難しいかもしれない。しかしそれぞれのアプローチを相互に参照しつつ接合していくことは可能であり、また必要でもあらう。それは実際に、最近のいくつかの事例研究において試みられていることでもある。

その具体例としてウィマーの研究とブルーベーカーの研究を挙げておこう。すでに本章では二人の研究を国家論的アプローチの項目のなかで紹介しておいた。しかし彼らは、ネーション概念の「意味」の側面に関しても強い関心を向けている。ウィマーは、意味理解の形成を「文化的妥協への交渉」過程であるとして把握する「文化の話用論」を展開しつつ、それが国家権力や集合財の配分をめぐる政治闘争といかに関連しているのかを分析する枠組みを展開している。彼はそれを、イラクにおけるクルド・ナショナリズムやメキシコにおける「メスティゾン」や「インディアン」のナショナリズムの事例へと適用している (Wimmer [2002])。またブルーベーカーとその共同研究者たちによる研究は、ルーマニア西部の町クルージュにおいて、ハンガリー人とルーマニア人がそれぞれの「民族」カテゴリーをいかに理解し、いかに用いているのかを分析したもので

ある。彼らはそれに対して、国家の制度的変動と民族間の政治闘争との関係を中心とした「上から」の過程と、一般の人々の日常生活における「民族」カテゴリーの使われ方を中心とした「下から」の過程との双方からアプローチしている (Brubaker et al. [2006])。

これらの研究はともに、ネーション概念の「意味」と、政治闘争のなかでのネーション概念の「動員」との観点を接合したものであり、ナショナリズムの多様なあり方を分析することを目指したものであるとして評価することができるだろう。

おわりに

本章では、最近の約30年を中心としてナショナリズム論の展開を概観してきた。最後に確認しておきたいのは、ナショナリズムの「理論」は決して経験的研究から独立した研究領域として展開されてきたわけではないということである。ナショナリズムの理論は、経験的事例研究のため、あるいは既知の経験的事例を整理したり比較したりするための分析枠組みとして構想され、彫琢されてきた。今後さまざまな事例研究を通じて、ナショナリズムの理論がさらに発展していくことが望まれる。



読書案内

これまで日本でも、ナショナリズムに関する本はたくさん出版されており、一般的な読み物としては興味深いものも少なくない。だが、学術的な観点から見えて満足できるようなナショナリズム論の入門書はそれほど多くはない。そのなかで2008年に出版された塩川伸明『民族とネーション——ナショナリズムという難問』(岩波新書)は、最近の理論的成果を踏まえうえて国民国家の登場から現代までのナショナリズムの歴史を概括的に論じ、そのアクチュアルな問題点をさまざまな角度から指摘したものであり、出色の入門書である。また、やや古くなったが山

内昌之『民族問題入門』（中公文庫）は、理論的に洗練されており、依然一読の価値がある。だが、この二つともナショナリズムの理論の展開それ自体について詳しく紹介しているわけではない。

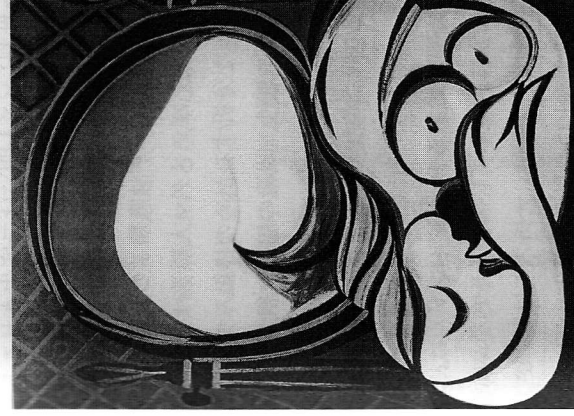
となると、英語でアタックするのが早道かもしれない。最近英語圏では、ナショナリズム論の入門書が続々出版されているからである。そのなかでは、U.Özkirimli, *Theories of Nationalism: A Critical Introduction* (St. Martin's Press, 2000), G. Day and A. Thompson, *Theorizing Nationalism* (Palgrave Macmillan, 2004) の二つがよい。前者は、古典的ナショナリズムの「近代主義」と「反近代主義」の構図について詳しく、後者は「古典以後」に関してバランスのよい記述をしている。

また、初学者にはやや難しいかもしれないが、直接ナショナリズム論の古典に挑戦する方法もある。幸いアンダーソン、ゲルナー、ホブズボーム、スミスらの主要著作は翻訳されており、日本語で読める。その際、大澤真幸編『ナショナリズム論の名著 50』（平凡社）は、古典を含めたナショナリズム論の名著に関する格好のガイドブックとして必携であろう。

なお、本章は全体が、日本語と英語での文献案内としても読めるように書かれている。各論点でふれられた文献を参照してもらいたい。

第2章 ナショナリズムとは何か

ドグマ人類学の立場から



パブロ・ピカソ「鏡」（1932年）

＊愛人マリ＝テレーズを描いたと言われるピカソの絵に、ピエール・ルジヤンのドルは主体という制度的存在の現代的な演出を見出す (Legendre [1998])。丸くうすくまり、指をくわえる女性性は生まれたばかりの赤子と思わせる。しかし、鏡に映し出された愛人の曲線は、エロティックなイメージという象徴的なものや制度的なものに属する。ここにあるのは分割である。すなわち、動物的な生と象徴的な生との分割であり、ことばをはじめとする人間的な営為はこの分割を前提とする。その意味で、この分割は制度への入り口である。しかし、鏡の役割はそれに尽きない。ギリシア神話のナルキッソスが狂気に陥ったのは、欲望に駆られて、水面の映し出したイメージを自己として信じていることができなかったからだ。つまり、鏡は分割からの逸脱を許さない禁止を命じると同時に、この禁止への信を要求する。鏡の向こうには何も無い。いわば無から規範を作動させるための仕掛けがそこにある。無の表象としての鏡には制度の存立が賭けられているのだ。この人間にとつての根源的な場面から国家や法といった西洋の発明した諸制度を捉え直すのがドグマ人類学である。＊

嘉戸一将